1

大きな仕事をした。ひと月は仕事をしなくても暮らせていけそうだ。それを沢井に告げるため、私はでかけていった。

そのバーは、六本木の外れ、飯倉片町から麻布台へと抜ける目抜き通りの裏側にある。表通りに面した高級イタリア料理店と中でつながっているが、客の行き来はほとんどない。

表通りの店は、青山や六本木に高級フランス料理とかわらない値段をとるイタリア料理店がオープンするまでは、子供向けでないパスタ料理を食べさせる、唯一の存在だった。おかげで客は有名人やら金持ちやらがひきもきらず、店内は最新ファッションの、店の前の通りは高級外車の、陳列場となっている。

反対に、裏側にあるバーはいつもひっそりとしていて暗く、店の人間はバーテンダーがひとりいるにすぎない。客も常連ばかりで、皆どこか変わっている。たいてい、人にいえない過去をも

ち、今も堂々と看板をだせないような稼業で暮らしている。

私もそのひとりだ。仕事はしごくまともだが、やり方がまともでないことに定評がある。もちろん、そうした評判がたてばたつほど、仕事の方は増えこそすれ、減ることはない。

私にとっては、この店は連絡事務所である。年中無休で午前四時まで開いており、客の素性に気をとめないここは、ひどく勝手がいい。

ただしバーテンダーである沢井には、そのために飲み代以外のチャージも払っている。

この店を訪れ、私につけられたある渾名を口にする客がいれば、それはバーではなく、私の客、ということになる。沢井はその客のために一杯目だけは店の奢りをだす。二杯目以降が誰の勘定になるのか、私は知らない。というのも、私に仕事を頼みにきた客で、この店で二杯以上の酒を飲んだ者はいないからだ。

その夜、私がバーに入っていくと、カウンターをはさんで沢井の向かいに筒野がいた。でっぷりと太っていて、着ているものはそれほどではないが、腕時計や指輪、カフス、ネックレス、ブレスレットなど装飾品をあわせると、優に一億をこえる金額を身につけている。筒野という名はもちろん本名ではない。この店でそう呼ばれているだけだ。

筒野の仕事は、密輸専門の運び屋だった。ただし、麻薬と武器の類いにだけは手をださない。そのどちらもが、密輸が発覚した国によっては死刑になるからだ。身につけているものが高価なのは、つかまった場合、即座に賄賂としてさしだし逃れるためだと聞いている。

筒野もこのバーを根城にし、連絡事務所にしている。つまり、私と同じで、この陰気な店にしては高い酒代を払っている仲間だ。

バーテンダーの沢井は、もとプロボクサーで、いいところまでいったが、ボクサーとしては致命的な欠点である「グラス・ジョー」のため、一度落ちるところまで落ちた男だった。私がそれを知ったのは、今からもう何年も前に、ある賭場で用心棒をしていた沢井を、その賭場の裏にある工事現場に落ちていたスティールパイプで殴り倒したときだった。

互いにそのときは仕事だった。したがって恨みやわだかまりはない。

おしなべてプロとはそういうものだ。陽のあたる世界ならともかく、この裏側の狭い社会では、商売敵などにいちいち恨みを残していたら、殺しあったあげくひとりもいなくなってしまう。スポーツマンシップなどかけらもない業界だが、いつまでも恨みをもちこせば結局は自分が生きづらくなるだけなのだ。

筒野は好物のフローズンダイキリを前にしていた。ダイヤモンドの巨石が光る丸まっちい指で、ひょいとグラスをもちあげてみせた。

「いらっしゃいませ」

四十に手が届こうというのに、きのうまでディスコのボーイをしていたとしか見えないような沢井が、やけに嬉しそうな声で私を迎えた。今どきもう、潰してゲームセンターかカラオケボックスにした方が儲かりそうな日焼けサロンに通っていて、やけにきれいな小麦色の肌をしている。笑うと、まっ白な総入れ歯が光るのが自慢だ。ときどき、そうなる原因を作ったのが私であることを思いださせるために、日焼けサロンに通っているのではないかと、私は思うことがある。

「今日はずいぶん早いですね」

筒野とはふたつおいたストゥールに腰をおろした私に、沢井はいった。

「ちょうどよかった」

「よかった、とは？」

私は沢井を見やった。嬉しそうな顔から、おおよその見当はついていた。

「さっき女の声で電話がありました。何時頃、きているかって」

「俺がか」

私はいって、ちらりと筒野を見やった。聞こえないふりをしていた。互いに仕事は知っているが、その中身を話題にすることはめったにない。

「もちろんですよ。あと一時間くらいしたらくるんじゃないですかね」

「じゃあ、断ってもらおう」

「え？」

沢井は心底、驚いたような顔をした。本当は私がなぜそういうのかを知っている筈なのだ。一件の仕事で私が得る報酬の四分の一は、沢井の懐ろに入る。

「休み、とるんですか」
不服そうに沢井は唇を尖らせた。
「ああ。どこか南の島にでも飛んで、のんびりしようと思っている。今日はその行先を筒野さんに相談しにきたんだ」
「ゴルフ、釣り、それともビーチで寝そべるだけかね」
筒野がすすっていたダイキリのグラスをおろし、いった。チンチン、という澄んだ音がする。ダイヤをグラスに軽く当てているのだ。
「全部いいですな。ついでに怖い病気の心配もない女の子がいれば最高だ」
筒野は面白がっているような表情で私を見た。
「本気で知りたいのかね」
「ええ」
筒野は沢井を見た。
「メモ用紙を」
ふくれっ面の沢井は、カウンターの内側からメモ用紙をだした。飯より金を数えるのが好きな男だ。私と同じように大枚を稼いだくせに、私が休んで次の仕事の取り分が入らなくなるのが面白くないのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。